

龍膽寺雄全集

龍膽寺雄全集第十二卷

昭和六十一年六月十五日 印刷
昭和六十一年六月二十日 発行

著者 龍膽寺雄
りゅうたんじゆう

神奈川県大和市中央林間二一四一五

発行者 龍膽寺雄全集刊行会

河野進

発売所 株式会社昭和書院

東京都新宿区神楽坂二一九

銀鈴会館二〇七号 〒二六〇

電話 〇三二六〇九三五四
振替 東京七一八三三七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1986 Y. RYUTANJI

ISBN4-9151122-57-3

目次

創作小説 昭和初期編

海の Illusion……………7

M・子への遺書……………20

創作小説 戦前・戦中・戦後編

親切を売ります……………51

お不動さまはご存じ……………184

初出	243
----	-----

解説	保昌正夫	244
----	------	-----

龍膽寺雄年譜	小俣裕介
--------	------

創作小説

昭和初期編

海の Illusion

海の Illusion

子安貝の貝殻を耳にあてると、中になつかしい海の音がするという。あの古陶のような艶々と冷たい石灰質の孔には、昔、海底にこの貝が住んでいた時分さんさん聴き飽いたであろう海の揺籠の唄、——汀の砂地を洗う潮の音や、空飛ぶ鷗の翼の音、夜の千鳥の声ぐらひは、思い出に籠めておってもいい。しかし、なつかしい淋しい海の音は、古い貝殻の中に住まっているばかりではない。

わたしのかたかたの耳の中にもある！ 医者とは、昔海で水浴びて潮をいれたなごりの、内耳の神経の故障だという。そうだ。それでわたしのかたかたの耳には、深い潮鳴りの音が籠もっているのだ。額に苔のような皺をきざみ、じっと眼を閉じると、孤独な魂の底へ響いて来る、風のような淋しい海鳴りの響。——

昔、ものおぼえもふたしかなくらしい昔である。わたしはジャッキウズというフランスの映画をみたことがある。スクリーンの上に、色々なつかしい印象を残して動いた人たちが、最後にはみんな戦争で斃れてしまう。そ

う、ヨオロッパ戦争直後の、いつてみれば戦争呪詛の映画でもあったろうか、最後のサインは、見るかぎり地平のはてまで並んだうら淋しい墓標の列なのである。どこかの海岸でおそらくロケエションして、遠景の空と海とは、墨で一色に塗りつぶしたのであらう。足元から平坦にはてしなくひろがった砂地は、陽に輝いて眩しく白いのに、地平の上の空は絶望的に暗澹として、まるで夜だ！ 真っ黒い十字架が、近くのは大きく、はるかかなたのは黒い無数の点となって、整然と、地平のはてまで並んでいる。むろん、生きた人影などはない。こんなところでは、陽だけが眩しくて、風も吹かないのであらう。

ところが、どうだ。

遠景の消しようが、ぞんざいだったのであらうか。沖から汀へ崩れて寄せる濤が、一部分、時折牙のように白く光って、かなたの暗い空の下に見えるのである。

暗澹たる空。

時折、その下に一線に、キラリと光る濤。――

映画がまだ、スクリーンの上で、口のきけなかった時分のことで、むろん濤の音はしない。しかし、音のない

濤の響ぐらい、白けたわびしさがあるであらうか。わたしはあの淋しいサインを思いだすたびに、今でも、何かしら総毛だつのである。わたしは、海の淋しさをよく識っている。子安貝の貝殻の中にきこえるという海の音は、わたしの耳にもいつも籠もっているのである。

例えば、輝かしいあの八月の海辺！

海岸日傘の派手なだんたら渦模様が、汀の明るい砂地に夥しく大きな花を咲かせ、罌粟のはなびらや瑠璃紺黄縞の深海魚の水着をつけた乙女たちが、陽焼けた織い頸から、シャボンの泡のような濤の飛沫を陽にはねかして、嬌声を空高くはなつていようと、海はやはり淋しい音をもっている。そうして、波は、――やはりジャッキウズの最後のサインの、あの牙のような、白けた淋しい波なのである。

夏八月、空の深いあの暗さを、ひとは識らないのであらうか。

わたしがしかし、海になつかしきを感じるのは、秋である。秋も八月から九月へかけて、避暑季からはみだした海は、浮気で輝かかった夏の賑わいを、はかない思い出にとどめ、ようやく本来の人うとましい寂寥をとり

もどす。白けた陽ざしの下へ清潔にひろがった汀の砂地。漣はそこへ沫を吹きあげては扇なりにひろがって、サラサラと冷たく砂をもてあそび、雪紐のような泡のきれぎれを残して、淋しく消えるのである。沖を走る水脈^{みなわ}もどこかもはや荒々しく波立って、輝かしい紺青の底には、しかめ面した冷たい鉛色が濃みかけている。――

どうかするとそれでも、カラリと白けて拡がった砂地のかなたこなたに、帰り遅れた避暑客のひとつかたまりふたかたまりが、色褪せた海岸日傘を陽にかしげ、しみつくような濃い蔭りのぐるりにちんまりと寄って、秋じんだ波の音を聴きながら、淋しい団欒をしていたりする。もう影法師も長い！ 陽はキツカリと斜めに肩を切る。

八月もなかばすぎると、避暑客はポツリポツリと都市恋しく海をひきあげて、輝かしく人に埋まっていた汀の砂地には、脱け齒のあとのような空地が出来るのである。浮気で忘れっぽい避暑地の友だち。昨日トランプをかこんで敵味方となつこく戯れたお隣の海岸日傘の人々は、今日はもうどこへ行ったのであろう。あの人たちの踏み荒らした砂地の足跡は、まだ、夜の漣にも消されずに、昨日のままそっくり残って、サラサラと陽に崩れて

いるのに。――

こんな日、海は深い海鳴りをしている。

地の底から伝わる、^{こがし}雨のような淋しい響き！

しばらくわたしに、回想を許していただきたい。

もう、何年になるであらう。わたしがP・夫人と一緒に海で遊んだのも、こんな日であった。わたしは慶応のブルジョワ学生で海には母も弟も一緒に来ていた。P・夫人は母の里方の近親で、貴族の出であり、夫の子爵は、P・夫人と三人の娘とを故国へ残して、すでに七年このかた海外にあった。――外務省属の高級官吏外交官だったのである。夫人は子爵と不幸な結婚をした。その隠れた事情に世間は責任なき憶測を逞しうしている。まことに夫人は薄幸であった。そうして、その薄幸は夫人の美貌に似合ってしまった。なぜなら、幸なき人々に、神は美貌を授けたまうのであるから！ わたしはその年、兄をなくした。兄は海軍士官で、巡洋艦・Lに所属して艦にいたのであったが、その時分チブスを病んで横須賀海軍病院の隔離室にいた。わたしはすでにのべたように、慶応の学生で、しかしその年は、一学期の講義を完全にわたしは空白にして、隔離室の病房に兄のベッドに

つききつて、母と病人の看護に手をつくしたのであった。

穿孔性の腹膜炎で兄は斃れた。

発病からまる四月。――

震災直後の殺風景な、ブラック建の隔離室で、わたしは兄の部下の、献身的に兄を尊敬し、これにつかえている沢山の水兵たちにかしずかれて、自身海軍士官にでもなったような気持で、四箇月間、風変りな生活をした。ガアゼのマスクと糊のこわい白衣とに包まれ、母もわたしも生涯、消毒薬の匂をからだにしましたかと思えたのであった。今でも眼に映っている！ 兄の病室の窓のついそこには、石炭殻と錆びた鉄材の散らばった殺風景な空地を区切って、崖崩れした粘板岩の層が岬のようにつきで、翼のきかない大きな鳥が一羽、よくそこへ来ては、躊躇った崖のはなに不骨にとまっていた。――

不吉な予感！

そのしばらく前から、わたしは二十歳の血気でわたしの家庭に離反して、海軍士官をして艦に乗組んでいるこの兄に、ブルジョワ大学の派手な学生々活の保障を受けていた。ネロのような暴君の専制をもって家庭に君臨

し、金をつくることばかりうまい利己冷酷傲岸な長兄。徹くさい千年の家系と伝統と家風との中で、それでなくとも二十歳のわたしの、薔薇色の夢と青春と自由とは、窒息し、匂いを失い、萎微沈滞しかけていたのに。

わたしは青春の名において、今や、わたしの環境と闘わなければならぬ！ わたしはかくして、二十歳の青春の血氣にまかせて長兄の傲岸な鼻柱に、敢然宣戦の布告をしたのであった。

老いた母の歎き。――

巡洋艦の甲板で、海風に頬を陽焼けさせた海軍士官のわたしの次兄は、わたしの性格を理解し、わたしの心意氣を買い、よろしい、やるんなら華々しくやれ！ 兄弟喧嘩もまたひとつの華だ。タンポポの種子を見るがいい。きょうだいごとくひとつ心意気であるなら、親は子供をひとり生めばいい！ 源氏と平家とにわかれて、子供がそれぞれ闘うようではなくちゃ、親は大勢子供を生んだ甲斐がない。――

颯爽と、そうして明快に、彼はわたしにケシかけるのであった。

そのくせ、神経のこまかい、そうして、きょうだい思

いで、母には孝養を、あらゆる周囲をば、快気と温情とで優しく包んで、自身の生活などは殆どかえりみなかった次兄。母やわたしや部下たちの、献身的な愛情と看護との中で、しかしまだ妻もなく子もなく、殺風景な海軍病院の隔離室で死んで行った兄。

わたしの生活は、当然ここで、ひとつの大きなつまづきに遭つたのであつた。長兄からの積極的な保護の申しでを、更にアマノジャクに峻烈に拒絶したわたしは、ここで最後の、生活の保障を失つたのであつた。わたしは金づかいの荒い、派手で贅沢な慶応の学生であつた！そうして、世間を識らぬ二十歳のおぼっちゃん育ちで、環境がかくの如く急激に回転しても、さしあたり生活を自立せしめる何らの自信も持たないのであつた。

夏休みが来た。

看護づかれと気落ちとで、すっかり健康をそこねてしまった老いた母に附添つて、わたしは弟と暑さを避けるに海へ出かけた。沼津。——海岸の千本浜公園にはP・夫人の簡素な別荘があつた。わたしたちが夏のいつときをP・夫人の一家とここですごすのは、毎年の習慣となつていたのである。海はすでに避暑季のさかりの頂上にあつた。

亭々たる百年の松に綴られた公園も、汀の砂地も、海も、人で一杯で、まるで生きて躍っている！夏八月松原越しに富士を仰いでみたまえ。愛鷹山の肩から、クッキリと紺青の山肌を見せて、焼けた眩しい空気の奥に、嶺近く、わずかに消え残つた雪溪のまだらが、ブラチナのようにかげろつてゐるのではないか！

海岸には、海岸日傘が数々明るく花咲いてゐた。

そこらに群らがっている派手な水着の彩り。陽の下に輝くガラスの粉のような沫き。松風と崩れ波と艶かしい嬌声との交響楽。——

毎夏海で一緒にすごすP・夫人の三人の娘たちは、年ごとにみんなスクスクと手脚がのび、ものごしからだつきも見ちがえるほど、一人々々大人びて来た。十三と十六と十七の総領の女の子などは、無邪気に砂地に転がって、なにげなく手脚をからめて戯れたりしても、何かしらふと気がさすほど背丈も大きいのである。母親が不幸である、子供もその捲添を喰うものと見える。女の子たちは年齢通り子供らしい無邪気さの底に、何かしら暗く蝕まれた不健康な蔭影があるのである。何というか、例えば、何もかも開放して、相手かまわずなつくつく打

解けて、からみつくかと思うと、理由なく、だしぬけに暗くむずかしく不愉快に自分をとざして、ひとうとましく自分の中へ閉じ籠もってしまうのである。きょうだい三人ともみんな別々の秘密をもつて、かたくなに利己を守り、そうして、ちりぢりばらばらなのである。一番上の娘は母親ゆずりの稀有な美貌をもった、それでいて上唇に薄らにヒゲなどはやかして、情智ともに鈍く、晩熟で、冷たい不快な性格をもっていた。とりたてて何に興味を動かすわけでもなければ、あらゆる刺激に鈍感で、女の子らしい繊細にして敏感なある反応をも返さないものである。砂のように寂漠として、味もそっけもなく、しかも暗く、ダルな性格。

この種の性格とは不調和な、しかし実に驚くべき美貌なのである。この美貌が仇なしたのであろうか。これはきょうだいの間にも堅く今だに秘密を保たれているのであるが、母親のP・夫人の過失から、家庭教師として識らずに深く接近させたある青年に、女の子は十一二の童女の時分に無邪気に犯された。——こうした不幸な経歴を、この娘はもっているのである。あるいはそんな特殊な過去が、女の子の性格に何か病的な、暗い蔭りを沈澱

させたのであろうか。

二番目の、中の娘は、これは姉と相反してきわめて活達で、明るい、派手な、浮き浮きした性格は、母親からそのまま受けたのであろう。顔立も体質もまた姉とはまるで別で、血肥りで、色の白い、柔軟な皮膚をした、——御飯のたびに、もうナマイきに瘦せる苦勞をしているのである。胸から腹からお尻までズンドウにむつくりと太くて、肩のまるみや腿のあたり、紫ばんで白い肉がコリコリしているという風である。可愛くはあるが、決して美しくはない。

母親に似て社交家で、早熟で、少しばかり淫らで、伶俐で、とびきり敏感だ。野球やラグビーが大好きで、同時に一面文学少女でもある。姉などの情智では到底まだ理解出来そうもない高度な小説などにかじりついたり、そうしては、母親のP・夫人を歎かせるのである。

「蘭子は、……いまに、不良少女になるのではないでしょうかしら？」

三番目の娘は、これは今のところ平凡である。いや、まだ年齢の底から性格がめざめないものであろう。おとなしくて、素直で、それでいてP・夫人にいわせれば、き

ようだいじゅうで一番強情で、キツくて、いずれ大きくなったら、間違いなし、檀那さまをお尻の下に敷く奥さまになるであらうというのである。

まだ季つ子で甘えて、母親の膝からあまり離れないので、その性格はわたしには保証出来ない。年齢よりは性格の発育のやや遅いのが感じられる程度である。

そして、P・夫人自身は？

わたしはP・夫人の容貌、姿態、性格、その他を、あらためてことまかくここに描くかわりに、わたしの平素抱いている、そうして、わたしの現在までの長からぬ経験が、常に、しかしその正しさを実証して来た親子なるものの法理哲学について、物語る方がちかみちであると思うのである。ほかでもない。

子供というものは、そのあらゆるもの、心もからだも、そうして運命まで、親から与えられた以外の何ものでもないのである。つまり、子供たちの生活のもつあらゆるものは、結局、親に帰納される！

P・夫人は実にそんな女性であった。

わたしの海の Illusion を語らうとして、いつとなく、おしゃべりの軌道を、本来の目的から遠くはずして来て

しまったもののような気がする。わたしは今、回想の糸を興のままに、ただ手繰っているだけなのである。そうだ！ わたしはその時分、この三人の女の子やその母親に、こんな興味をもって、こまかい観測の眼を向けたのは、今にしてみるとちゃんと理由があるのである。わたしは男の子ばかり四人きょうだいの中で育って、その上二十歳を幾つも出ない青年なのである。わたしのからだはわたしの青春の血に悩ましくすぐられて、もしわたしのぐるりに女の子がいなかったら、公園の禁断の花園でもわたしは手あたり次第美しい花の蕾を薔薇でも百合でもダリヤでも、片っぱしからむしりとりて、はなびらはおろか堅い芯まで、粉々にちぎり棄ててしまったにちがいない！

青春とはそうしたもののなのである。

わたしはP・夫人の年稚いこの女の子たちと、昔の習慣通り屈託なく、海の別荘で無邪気に戯れながらも、無雑作に畳にヌタくっている編下げの髪に、何げなく指が触れたりすると、——ふとしたはずみに、突然、ムズムズと心臓を血でくすぐられて、わたしは自分の呼吸から、自分で悩ましい青春の匂いを感じたりするのであつ

た。女の子の下げ髪は、冷いやりとしながら、柔らく、ヌラついて、何かしら蛇の感触をもっている。

わたしはしかし、その夏は、心に別に大きな屈託を秘めているのであった。ほかでもない。わたしはもう、昨日までのような、派手で、贅沢で、金づかいの荒さを明るく自負するような、ブルジョワ学生的身分ではないのである。いわば、喪家の犬なのだ！ 財布の腹を膨らましているなにがしの金額の紙幣束は、ことごとく母からの預りものであるし、涼しい海の別荘に、華やかな彩りと匂いにと包まれて、こうしていつもの習慣のようにことなげに滞在していられるのも、いわば母の、わたしへのひそかな心づかいからなのである。母は彼女の避暑地保養の附添いとして、長兄の手前名目をつくらってわたしを伴ったにすぎないのである。

しかし、——母にはそれ以上、わたしの将来の生活を解決する力はないのである。善良なだけで、弱々しい、内気な、忍従主義の母。長兄の眼色をしじゅうオドオドともの悲しく伺っては、誰の眼にも隠れたところで、家庭的にも一番、心とからだとの負担の重い役割へと、あさり廻っている老いた母！

夏休みが終わって、母たちが海をひきあげたら、わたしは一体どこへ身を寄せどこへ身を落ちつけたらいいのだ？ 学校どころではない。わたしは、今は身を寄せるめあてさえないのではないか！

弟は、別荘ではひとり人気を背負っていた。鼻のまんならぐ膨れたイガ栗頭の中学の三年生で、無頓着で、ヌウボオで、塚原ト伝をまじめにとでんときめこんでいたり、別荘の台所で、砂糖壺と一緒に棚からおっこったり、——おのずからしてひとを笑わせるヌウモアがある。善良で、屈託もこだわりもない。P・夫人の中の女の子などはこの弟がお気にいりで、日夜はなさないのである。わたしにしてもこの弟は可愛い！ たったひとりの肉身の弟なのである。亡った父が、もう中学校の一年生にもなったのを、死の前の夜まで自分で赤ん坊のように抱いて寝て愛撫したという弟。むろんまだほんの子供で、長兄とわたしとの、宿命的な性格の争いなどについては、何も識らない。子供のない長兄夫婦の間に、あとりの準養子ときめられて、ゆくゆくは香淋寺の徹くさい千年の家柄や、いつときより傾いたとはいえ、まだまだ礎のゆるがぬ昔むした広大なあの土地資産を継ぐの